

予測システム導入時期のメリット・デメリット比較表

○：メリット、◆：デメリット

	A案：R5年度に導入	B案：数年後に導入
総論	<ul style="list-style-type: none"> ○ 試行錯誤（仮説検証）の繰り返しや天候など関係性の高いデータとの掛け合わせにより予測精度の向上を図ることで、<u>地元商店街関係者にデータ活用のメリットを早期に実感してもらうことが期待できる。</u> ◆ 検討会における議論の時間を十分確保できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 計測機器導入から数年間はデータが蓄積されるだけになるため、予測システムが導入されるまでの間、地元商店街関係者のモチベーションを維持するための施策を検討する必要がある。 ○ <u>予測システムに限らず、収集したデータを商店街店舗の経営にどのように活用するかについて十分に議論することができる。</u>
予測精度	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 一般論としてシステム稼働時の予測精度はあまり高くないということを理解しておく必要がある。 ※ 経時的なデータ蓄積やアルゴリズムの改修等により徐々に精度向上が図られる性質がある ◆ このことを商店街関係者の間で共通理解として形成していない場合、「使えないシステム」と誤認され普及が進まないことが懸念される。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 同左（◆の1つ目、2つ目ともに） ○ ただし、一定程度、データが蓄積されている状況でシステム開発が行われるため、A案よりは稼働時の予測精度が高くなると思われる。
仕様の検討	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 見切り発車的にならざるを得ない部分はある。 ※ 検討会に諮る必要が生じた場合には、都度、リアルorオンラインで各委員の意見を聞きながら進めることになると思われる) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 検討会等において議論する時間が確保できる
費用面	<ul style="list-style-type: none"> ◆ IT導入補助金の活用を前提とした場合、3千万円の上限を超える場合、地元負担が増嵩する。 ○ 計測機器導入とセットで発注するため管理費的な共通経費の削減が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ IT導入補助金を活用する場合、それぞれの年度で上限3千万円が適用されるため、地元負担が軽減される ◆ 一方、IT導入補助金など活用できる国の補助制度が導入時まで存続していない可能性がある。 ◆ （同じ仕様で発注する前提では）分割で発注する分、割高になるのではないかと考えられる。
その他		<ul style="list-style-type: none"> ○ R6年度以降に導入するとすれば、いつ頃が妥当か？